



「業平画像」福田眉仙筆(美術博物館蔵)



●業平の歌碑(松ノ内緑地) “世の中に たえて 桜のなかりせば 春の心はのどけからまし” 平成3年・芦屋文化友の会建立

「業平画像」福田眉仙

福田眉仙(ふくだひせん・1875~1963)によって描かれた業平画像(昭和初期ころ・絹本着色)。美術博物館蔵。縦127.8cm×横56.7cm 掛軸。大正9年に芦屋に居住してからの、晩年を当地で過ごした。六甲山を愛し、その山並みをよく題材としたほか、歴史画も多く残している。本図は、不遇寺蔵「在原業平像」を参考にしたと思われるが、原因よりは柔らかな表情に描かれている。

仕事に忙しいので、黄楊の櫛を揮す余裕もないままに來てしまったことと、と詠んでいるのは、この里を詠んだものでした。この歌では、ここを芦屋の灘と言っているのです。この主人公の男は、ちやちやな宮仕えをしていたので、それを縁にして、近衛府・衛門府の次官たちが芦屋に集まってきたのでした。また主人公の兄も衛門督であったので、一緒にやってきました。

歌名所としての芦屋

六甲の山並みを背にして、芦屋川の流れが浜辺で交差する辺り、白砂青松の芦屋の浜は、古来より景勝の地として、多くの和歌が詠み継がれてきた歌名所です。都人が西国への往還の途中、初めて潮の香をきき、波間に浮かぶ漁船を遠望するのもこの地でした。平安貴族が都に近い観光地として、あるいは別荘地として風雅を楽しんだのも当然のことと言えます。同じ意味で、芦屋から1日で行ける行楽地として布引の滝も平安歌人に知られる所となりました。この、歌名所としての芦屋の浜・布引の滝を考えると、『伊勢物語』が最も重要になってきます。実際に、『伊勢物語』で芦屋の里が歌題になってから、芦屋は歌名所として多数の和歌が詠まれ、そして和歌を題材とした物語絵も盛んに描かれました。近世以降は、絵入り木版本の出現により、物語と絵が、広く一般に親しまれるようになりました。このように物語の享受は、古写本の伝授によるものだけではなく、『伊勢物語絵』などの絵画作品が果たした役割も、また大きかったと考えられます。なかでも、慶長13年(1608)に刊行された嵯峨本『伊勢物語』は、四十九図の挿絵を備えて、本書以降の絵巻・版本などに圧倒的な影響を及ぼしました。

阿保親王墓と芦屋

【親王さんの森】

市域の東部JRと阪急に挟まれた住宅地翠ヶ丘町に、静寂を保つ森があります。そこが古くから親王さんの森として市民に親しまれてきた阿保親王墓です。阿保親王は平城天皇(七七四)〜八二四)の第一皇子で、桓武天皇(七三七)〜八〇六)の孫にあたり、延暦十一年(七九二)に誕生しています。弘仁元年(八〇一)の藤原薬子の乱に連座して、大宰権帥として筑紫に左遷されますが、十三年後に許されて、都に戻ります。このころ、仲平行平守平・業平の四子に賜姓を請い、在原姓を賜りました。

兼弾正尹となりましたが、この年の十月二十一日に薨去(五十一歳)した。『続日本後紀』によれば、親王は文武両道に秀でた人でありながら、慎重な人であったと記されています。親王が芦屋で葬られたことについては、正史に記載がありません。親王と芦屋の関係については、山口県立総合資料館の毛利家文庫に「阿保親王御廟誌」、阿保親王事取集、「阿保親王竹園伝記」等があります。また、親王の菩提寺と伝えられる打出町の阿保山親王寺にも毛利家の記録が伝わっています。

親王寺に伝来する阿保親王寺縁起二巻と、鼻祖阿保親王藤原竹園の伝記二巻は、親王の事績に詳しいのですが、ともに親王が、承和九年(九一七)に、長門府中藩主毛利甲斐守綱(元一六五〇)〜一七〇九)が同寺に寄進したもので、元禄四年(一六九一)〜十月二十一日の日付があり、巻末に「今年今日八百五十年忌」とある。この一巻は、奉納阿保親王古廟とあり、その趣旨が明らかになっています。また、これらの史料では、親王寺建立は「承和十一年甲子、親王のすませ給う地を改めて、寺院を建立し、阿保山親王寺」として伝えられています。

「阿保親王御廟誌」によると、毛利家と親王家の関係は、前記した元禄四年の親王八百五十年忌あたりから密度を増したものと考えられます。それにも、なぜ、毛利家が元禄四年の段階で打出村の阿保親王墓と関わりを持つに至ったのでしょうか。打出宿が参勤交代の途上であり、いつも通過する場所であったということなのか、ともかく、毛利家は親王八百五十年忌から以後、親王寺に代参を差し向けているのです。

しかし、業平と芦屋は伊勢物語によって知られていますが、阿保親王と芦屋の関係については、現在でもあまり知られていないのです。

「伊勢物語」と芦屋

芦屋は、古来より歌名所として多くの秀歌が残されています。なかでも、「伊勢物語」に取り上げられた影響は大きく、業平ゆかりの地として広く一般に知られることとなりました。「伊勢物語」の定本では125段の物語があり、芦屋は第87段に登場します。今回は、芦屋ゆかりの第87段や美術博物館収蔵の絵巻物やかるた、また伝承等をご紹介します。

問い合わせ 美術博物館 ☎38-5432



「伊勢物語歌かるた」(美術博物館蔵)

芦屋は在原業平ゆかりの地とされ、業平の父・阿保親王の御座と称する親王塚があり、業平町・業平橋という地名もあります。このような芦屋と在原業平の関係は、すべて、この伊勢物語第八十七段に発しています。今回は、平成十二年に美術博物館特別展図録『伊勢物語と芦屋』から、『伊勢物語』の権威者・片桐洋一氏の解説文より、その原文と現代語訳を抜粋してご紹介します。

【第八十七段 第一場面(芦屋の里)】 昔、男津の國、菟原の郡、芦屋の里に、しるよしして、行きて住みけり。昔の歌に、芦屋の灘の塩焼き暇無み、黄楊の小櫛も押さず來にけり。と詠みけるぞ、この里を詠みける。この男、なま宮仕へしければ、それをたよりにて、衛府の佐ども、集まり來にけり。この男の兄も、衛門督なりけり。

【第八十七段 第二場面(布引の滝)】 その家の前に海のほとりにあそびありきて、いざ、この山の上のありといふ布引の滝、見に登らむ」と言ひて、登りて見るに、その滝物より異なり。長さ一丈、広さ五丈ばかり異なる石の面、白絹に岩を包めらんやうにならむりける。さる滝の上に、蓋の大ききして、さし出でたる石あり。その石の上の走りかかると、水は小椀子・栗の大ききにてこぼれ落つ。そこなる人に、皆滝の歌詠ます。その衛門督も、詠む。わが世をば、今日か明日か待つかひの、涙の滝といずれ高けんま次に詠む。

【第八十七段 第三場面(芦屋の浜)】 歸り來る道遠く、失せし宮内卿も、ちよしが家の前來るに、日暮れぬ。宿りの方をやれば、海の、漁火多く見ゆるに、かまの男、晴る夜の、星が河辺の華か、我が住む方の、海人のたぐ火か

【第八十七段 第四場面(雲林院)】 昔、芦屋の里に公光という若者が住んでいました。「伊勢物語」がたいそう好きで、業平に強い興味を持っていました。ある夜のこと、夢の中で美しく咲き乱れた花の中に業平が現れたので、「ここはどこですか」と尋ねると、「ここは京の都の北山にある紫野の雲林院」と教えられ、夢から覚めました。公光は、はるばる雲林院(うんりんいん)を訪ねていきました。ちょうど花盛りで、桜の枝を折ったところへ、老人が現れ、公光をどがめました。公光は「芦屋の里から訪ねてきた公光というものです。業平様の夢を見て、ここまで来ました」といいますと、老人は「今夜この花がけで待っている、伊勢物語にまつわる楽しいお話が聞けるでしょう」といって、夕蘭の中に姿を消しました。やがて夜になると、業平の魂が人の姿となって現れ、伊勢物語のことを語り、舞や音楽の遊びを続けているうちに、明け方となり、公光の夢は覚めました。

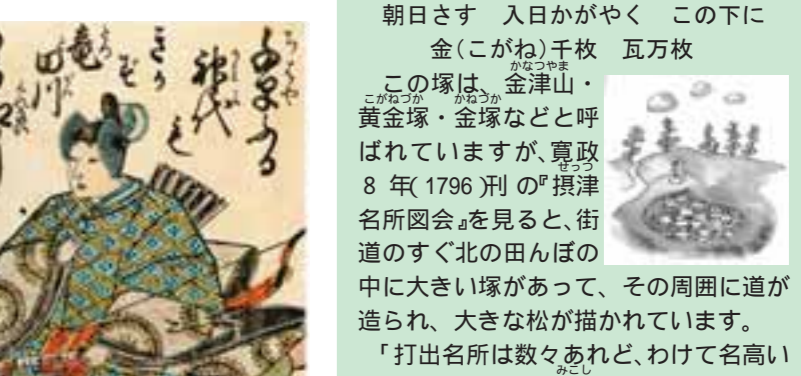
【第八十七段 第五場面(雲林院)】 謡曲「雲林院」(室町時代)は、能の創始者・世阿弥の自筆本が残る能本九曲の内の一つです。



上段2枚・布引の滝/下段2枚・芦屋の浜 「伊勢物語絵巻」狩野探雪・三十九人公家筆(美術博物館蔵)

【第八十七段 第六場面(黄金塚)】 昔、芦屋地方を治めていた阿保親王は、打出の地に別荘を建てて村人たちを愛し、親しみをもち接していました。村人たちも「親王さん」といって、たいそう敬っていました。親王は、村人たちに「もし、自然の災害などで困ったときには、この塚を掘って役立てるように」と、塚に宝物を埋めたといわれており、次のような歌が伝えられています。朝日さす 入日かがやく この下に 金(こがね)千枚 瓦万枚 この塚は、金津山・黄金塚・金塚などと呼ばれていますが、寛政8年(1796)刊の『撰津名所図会』を見ると、街道のすぐ北の田んぼの中に大きい塚があって、その周囲に道が造られ、大きな松が描かれています。「打出名所は数々あれど、わけて名高い黄金塚と、打出の御興かき音頭にも歌われ、街道を行く人々がお参りする名所になっていました。」

【第八十七段 第七場面(黄金塚)】 昔、芦屋地方を治めていた阿保親王は、打出の地に別荘を建てて村人たちを愛し、親しみをもち接していました。村人たちも「親王さん」といって、たいそう敬っていました。親王は、村人たちに「もし、自然の災害などで困ったときには、この塚を掘って役立てるように」と、塚に宝物を埋めたといわれており、次のような歌が伝えられています。朝日さす 入日かがやく この下に 金(こがね)千枚 瓦万枚 この塚は、金津山・黄金塚・金塚などと呼ばれていますが、寛政8年(1796)刊の『撰津名所図会』を見ると、街道のすぐ北の田んぼの中に大きい塚があって、その周囲に道が造られ、大きな松が描かれています。「打出名所は数々あれど、わけて名高い黄金塚と、打出の御興かき音頭にも歌われ、街道を行く人々がお参りする名所になっていました。」



「若鶴百人一首」(美術博物館蔵)



【撰津名所図会】(寛政8年・1796)に掲載されている芦屋の名所地。阿保親王塚(あほしんのうづか)／翠ヶ丘町。金津山(かなつやま)／打出小橋町。阿保山親王寺(あほさんしんのうじ)／打出町。

1月 広報ガイド 9ch. 芦屋市広報番組 あしや30 min. 放送時間(30分) オープニング うんじゃ隊の友 8:00 芦屋市の動き 市議会中継 ネット配信スタート 11:30 新春市長対談 「夢が描ける町 芦屋」山中市長VS大学生 対談者 外山 高広さん・菅 西さん 19:00 特集 「この町がすき」 歌いつぎたい 私たちの町の歌 ※DVD VTR 貸出可

近世大坂文人画の世界 ~関西大学コレクションを中心に~ 【展覧会】 ■展示期間 1月10日〜2月22日(月曜日休館・祝日の場合は翌日休館) >午前10時〜午後5時(入館 4時30分まで) ■会場 美術博物館 第1・第2展示室) ※同時開催 「昭和の面影3 くらしと道具」 【シンポジウム「大坂画壇展望」】 ■日時 1月10日(土)午後1時30分〜3時 ■パネリスト 関西大学教授・中谷伸生氏 / 大阪大学総合芸術博物館教授・橋爪節也氏 / 司会:尾尾圭造本館学芸課長 ■定員 先着80人(要観覧券) 【本館学芸員による列品解説】 ■日時 1月24日(土)午後2時〜3時 ■内容 文人画の評価について みんなで歌いましょう ■日時 1月16日(金) 午後1時30分〜3時 ■会場 講義室 ■指導 加藤純子氏(歌) 沖倫子氏(ピアノ) LOVE ASHIYA ■参加費 要観覧券 ※歌集をお持ちでないかた、歌集代1,000円 問い合わせ 美術博物館 ☎38-5432 観覧料: 一般500円/高校生・大学生300円/中学生以下無料(月曜日休館・1月12日は開館・13日休館)

謡曲「雲林院」 業平と公光 昔、芦屋の里に公光という若者が住んでいました。「伊勢物語」がたいそう好きで、業平に強い興味を持っていました。ある夜のこと、夢の中で美しく咲き乱れた花の中に業平が現れたので、「ここはどこですか」と尋ねると、「ここは京の都の北山にある紫野の雲林院」と教えられ、夢から覚めました。公光は、はるばる雲林院(うんりんいん)を訪ねていきました。ちょうど花盛りで、桜の枝を折ったところへ、老人が現れ、公光をどがめました。公光は「芦屋の里から訪ねてきた公光というものです。業平様の夢を見て、ここまで来ました」といいますと、老人は「今夜この花がけで待っている、伊勢物語にまつわる楽しいお話が聞けるでしょう」といって、夕蘭の中に姿を消しました。やがて夜になると、業平の魂が人の姿となって現れ、伊勢物語のことを語り、舞や音楽の遊びを続けているうちに、明け方となり、公光の夢は覚めました。 【第八十七段 第五場面(雲林院)】 謡曲「雲林院」(室町時代)は、能の創始者・世阿弥の自筆本が残る能本九曲の内の一つです。

黄金塚の黄金 昔、芦屋地方を治めていた阿保親王は、打出の地に別荘を建てて村人たちを愛し、親しみをもち接していました。村人たちも「親王さん」といって、たいそう敬っていました。親王は、村人たちに「もし、自然の災害などで困ったときには、この塚を掘って役立てるように」と、塚に宝物を埋めたといわれており、次のような歌が伝えられています。朝日さす 入日かがやく この下に 金(こがね)千枚 瓦万枚 この塚は、金津山・黄金塚・金塚などと呼ばれていますが、寛政8年(1796)刊の『撰津名所図会』を見ると、街道のすぐ北の田んぼの中に大きい塚があって、その周囲に道が造られ、大きな松が描かれています。「打出名所は数々あれど、わけて名高い黄金塚と、打出の御興かき音頭にも歌われ、街道を行く人々がお参りする名所になっていました。」